



手を取り合って人民大会堂に入る鄧小平氏（中）とゴルバチョフ・ソ連共産党書記長夫妻

（『中ソ新時代へ-三十年の対立に幕』（『世界週報』1989年6月6日号-1989.06.06

特集

"中ソ新時代"へ 三十年の対立に幕



1959年9月の毛沢東・フルシチョフ会談から30年の月日がたった

三十年ぶりの中ソ首脳会談は天安門前広場を埋めつくした百万人の学生デモによってすっかり影が薄くなった感じだが、両国関係に新时代を画す歴史的会談であつたことに変わりはない。同会談の歴史的意義と中ソ関係の将来への展望を中国問題専門家の中嶋嶽雄氏に、同会談が国際情勢全般に与える影響を戦略論の立場から田久保忠衛氏にそれぞれ解説してもらう。また、同会談を取材した北京、モスクワ両特派員の現地リポートとともにワシントン、ソウル、シンガポール、バンコク、ニューデリーの各特派員が同会談の任地の反響を（上）、（下）二回に分けて報告する。

中ソ首脳会談で変わる世界

中嶋 嶺雄

去る五月十五日から十八日までのゴルバチヨフ訪中の間の中ソ首脳会談は、世界注視のうちに極めてドラマチックなたちで終幕した。政治改革を掲げる学生たちのいわばペレストロイカ歓迎によつて、政治改革の主唱者だったゴルバチヨフ書記長は北京では天安門前広場に足を踏み入れることもできず、故宮博物院も訪れることができなかつたという、思ひもかけぬ事態を伴つた首脳会談であつた。また、胡耀邦氏の死によつて盛り上がり始めた学生デモが、ゴルバチヨフ訪中によつてさらには全国ではそれを上回る広範な民主化要求のデモとなつて展開されるという大変なおみやげを残して、ゴルバチヨフ書記長は五月十八日、上海からモスクワへ帰国した。このような出来事が舞台の背景に存在したこと自体、実は今回の首脳会談の性格を如実に物語つているようだ。

今回の首脳会談を実現させた鄧小平氏は、言うまでもなく中ソ論争から中ソ対立へ、そして中ソ和解へという現代史の一章に自ら当事者として存在してきた指導者である。それだけに、自らの責任において中ソ対立を締めくくり、歴史的な中ソ和解をもたらしたかつたという念願は極めて強いものがあつただろうし、鄧小平氏も今回の会談に大きな満足を得強く宣言されたといふところに、今回の中

のためにも中ソ両国の歴史的和解が必要であつたということを、今回の北京での出来事は象徴的に示したと言えよう。

意味ある党関係の改善

三十年ぶりのゴルバチヨフ訪中は極めて大きな成果を残し、同時に五月十七日のゴルバチヨフ書記長の「北京演説」は、ゴルバチヨフ登場以来、八六年七月のウラジオストク演説、次いで八八年九月のクラスノヤ尔斯ク演説に次ぐ重要演説として、ソ連の世界政策とゴルバチヨフ氏自身の世界認識を明白に示したものである。そこで八八年九月の「人民日報」と「プラウダ」の記者交換も実現することになり、これは両共産党機関紙の記者交換であるから、両党関係はここにおいてかたちのうえでも完全な正常化を遂げたという点でも画期的であったと思う。

もとより今日の「ペレストロイカ」や「改革」を求める中ソ両共産党には、もはやかつての中ソ論争の時期のようなイデオロギー対立の根は完全になくなつていたのだから、兩党間の関係が改善されることも予測できたことだが、改めてこうした両党関係の改善まで強く宣言されたといふところに、今回の中

覚えたに違いない。しかし、その鄧小平氏が民主化を要求する学生たちによつて退陣要求を突き付けられたということは極めて皮肉な歴史の行き違いである。鄧小平氏は、中ソ首脳会談の成功によつて自らの引退の花道を切り開くと思われていたが、自らの出処進退にきわめて厳しい選択を迫られることになるよう思われる。

ソ首脳会談の大きな意味があつたと言わざるを得ない。

そうした国家間関係及び党間関係の完全正常化は鄧小平—ゴルバチヨフ会談において実現したが、しかし同時に、中ソ国境線の確定であるとか、カンボジア問題をめぐる中ソ間の微妙な不一致など、問題が残されたことも明らかである。しかし、これらの問題についてはさらに実務レベルの会談において打開が図られるであろうし、のような親密な中ソ両首脳の会談を契機に、これらの点についても大きな決着がつけられると私は考えている。

さらに進む中ソ経済協力

第一は、そうした国家間関係や党関係のわだかまりに決着がついたということのみならず、これからの中ソ両社会主義大国の再生と再建のために、さまざまなレベルの協力関係がさらに強化されることになった点である。

こうした実務レベルの関係はゴルバチヨフ—李鵬会談やシェワルナゼ—錢其深両外相会談によつても詰めが行われたと思われる。中ソ間の経済協力、特に合弁企業の設立、すでに一部設立されている紙・パルプ合弁企業などの量的な拡大、さらにはゴルバチヨフ北京演説にも表れていたように、新しいシルクロード開発計画——これは中国の内陸開発の目

玉として、これまでソ連との協力によって進められてきたいわゆる大西北計画だが、新疆ウイグル自治区からカザフ共和国に至る新しい中ソ鉄道を中心とした中ソ国境地帯の経済的再建の青写真が明白に示されたことを指摘しないわけにはいかない。

そして、黒竜江省などを中心とする中国東北部と極東部ソ連との開発のための協力も今回ほど明るみに出たのであり、中国からの労働力の輸出、ソ連からのプラントや技術の提供、かつての中ソ友好時代の対中援助によつてできた工場や機械の補修、更新などの問題、そしてゴルバチヨフ演説が明らかにしていったように、今はそれほど大きくないとはいえ、中ソ貿易の積極的拡大、これはおそらくあと十年ぐらいのうちに百数十億ルーブルぐらいの規模に上ると見られる。これらの問題での中ソの協力など、二国間の経済交流がさらに積極的に進むようになつたことも注目すべきだと思う。

社会主义の緩やかな再編

こうして中ソ間関係にはさまざまな成果が記録された。これらの成果をもとに中ソ関係はダイナミックな発展を遂げていくと思われる。それが国際的にどのような影響を及ぼすかということについて最後に触れてみたい。

まず第一に、中ソ関係改善を軸にして、周辺の社会主义諸国にかなり大きな影響をもたらすだろう。中ソ首脳会談の開幕に合わせてモンゴルからソ連軍の撤兵が開始されたとい

北京の人民大会堂で会談する楊尚昆中国国家主席（右）とゴルバチヨフ書記長

改革が不可避の社会主义体制

三番目には、まさにゴルバチヨフ書記長がソ連の政治改革について北京演説でも言及していたように、そして李鵬首相のようなどちらかと言うと政治改革に消極的な人さえもゴルバチヨフ氏の前では政治改革、民主化の



うことも非常に象徴的である。ごく短期間のうちに四万五千人前後の在モンゴル・ソ連軍の四分の三が撤兵することが明るみに出たのだ。

こうしたなかで、中蒙関係の改善も進み、さらにゴルバチョフ北京演説にあるように、朝鮮半島の問題について、北側の南北統一政策を支持し、在韓米軍の撤退を条件に挙げてることなどからしても、北朝鮮と中ソの関係もさらに緊密化するものと見ていいだろう。カンボジア問題でも、民族自治を原則とした決着が図られる方向が出てくるということは、ペトナムのインドシナ半島への影響力を認めるということにもなるので、この点で中越関係が改善されていくと思う。

そして、東欧諸国との関係も含めて、社会主义の緩やかな再編、“緩やかな同盟”が編成されると思われる。

ゴルバチョフ書記長はこの点を「連帯」と表現していたが、こうした社会主義的な連帯関係の回復が一方で行われ、それを基盤として西側との交流を進めるという、社会主義の足場の強化という問題が出てくるように思われる。

従来のように、それぞれがばらばらの方向で西側に接近することのマイナス面、その危険な侧面についても認識が深まつたはずで、

ゴルバチョフ氏も中国の首脳層も社会主義あるいはマルクス・レーニン主義の新しい発展ということを強く強調していたことが印象的だつた。

アジアの軍縮に本気のソ連

最後に全世界的な影響だが、中ソ和解が昨年以来の米ソの歴史的な緊張緩和という方向のなかで行われたもう一つの緊張緩和であつたという点に注目せざるを得ない。特にゴルバチョフ氏は北京演説で、極東の兵力十二万人削減という問題を具体的に明らかにした。

十六隻の太平洋艦隊を含む船舶の削減をも明らかにしたが、ウラジオストクを拠点とするソ連の海洋戦略、海軍戦力がいよいよ、これまでの拡大から削減のほうに転換した契機だと見ていいのではないかと思う。

こうしたことは当然、米ソ関係の緊張を緩和し、さらにソ連がアジア・太平洋地域に中國とともに積極的に関係を強化する基盤を拡大したと思われる。

北京演説に表れたアジアにおける安全保障措置の構築、これを全アジア的安全保障プロセスと言っているが、ウラジオストク演説以来、いわゆるアジア安保という問題がアジア諸国や西側の警戒心を呼び覚ましたのに対し、今回は自らアジアにおける軍事力の削減

を具体的に示した。そしてその実行をおそらくこれまで通りやつていくという明白な見取り図のなかで、これまでアシアにはヨーロッパと違つて交渉と協議のシステムが欠如していきうことに言及しているだけに、單なる平和攻勢としてこれを警戒し、棚上げする

ということができるかねるような積極的な提案を、ソ連側が示してきたことになると言わざるを得ない。

当面、アジア・太平洋地域のなかで重要な役割を担つてゐる日本が、このゴルバチョフ提案をどう受け止めるかは、ゴルバチョフが今回の北京でも「日本を尊敬する」という言葉を使って日本との関係の改善を求めてきているだけに、日本はいよいよ日ソ外交の新しい展開を迫られることになるのではないか。そうした方向を日本がどう受け止めていくかという問題を突き付けられている。そういう意味でも、今回の中ソ首脳会談は、中国の民主化運動が建国四十年にして中国に「もう一つの革命」をもたらしつつある今日の重大な事態とともに、きわめて大きな影響を世界にもたらすものではないか。

（なかじま・みねお／東京外國語大学教授）



エグゼクティブのための国際情報誌

大正9年10月5日第3種郵便物認可
第70巻 第23号 通巻第3113号
昭和元年6月6日(毎週火曜日発行)
ISSN 0911-0003

世界週報

6/6
1989

WORLD WEEKLY

時事通信社

“中ソ新時代”へ——30年の対立に幕

サッチャリズム10年の英国経済

本格的に始まった米ソの外交戦



10年を迎えたサッチャー英首相